

# 姥捨山と両墓制遺跡について

— 姥捨山の再考 —

椀浦 勝

## はじめに

姥捨山の伝承については過去幾度となく研究者の注意をひき、さまざまな分析もおこなわれているが、約まる所、依然として「たとえは遺制としての墓所や史実としての棄老、また種々の民俗事象の反映といったことが、どのようにして一編の話を形成するのか。いうならこれこれの事実があったとしてその事実がどんな経路をたどって話になりえるのか。といったことが、捨象されているように思える。つまり事実と話とのダイレクトな関係が説明されていない。こういったことが説明されない限り、話としての発生、成立の真の理解がなされないのではないだろうか。だからこれらの説が述べているのは、これこれの事実があったとする、厳密な言い方をするなら伝説としての起原であって昔話の起原にはならないのではないだろうかということになる。1」とか、「各地の姥捨山の伝承には、昔話の形式をとるものと、伝説の形式をとるものが、かなり複雑にまじって伝えられており、必ずしも明確にわけられるとは限らない。2」としながらも「どこか特定の場所と結びつきながら、枝折やもっこや難題など、何らかの昔話のモチーフを含むものは、どうして棄老の習俗をやめてしまったのかというように、こまかにその

経過をたどるものであって、いわば昔話の伝説化にあたるものといえよう。3」と推測し、「姥捨山の伝説の資料をあげて葬送などの習慣との関係を中心に論じたい」4のために「実際に姥捨山の伝説の地について、どのように死体の遺棄が行なわれていたか、いっそうこまかな検討が望まれるのである。5」という段階にある。

つまり墓制や習俗との関係ありと指摘されてはいるが、その内容分析は、いまだしであり、さらに姥捨山の伝説と昔話との関係をどう考えるかについても然りである。

ここでは一地域（滋賀県伊吹町）で採話した6 姥捨山伝承の分析を通じて、墓制とのかかわりにおいて、全国の姥捨山を再検討してみること、姥捨山伝承の分類（伝説と昔話との関係）認識パターンに新たな視点を加えようとするものである。なお採話結果をまとめたものは表のごとくである。

## 一 墓制との関係

採話の結果、当地の姥捨山を特定することができた。そこは「野」とよばれ、本村から五百メートル程伊吹山中つまり東へはいった地点にあり、石灰岩露出の山地で四十坪ほどの窪地とその入口に集落（二十軒）があったとされる。

No	捨てる場所	被棄者	捨てに行く方法	被棄者の行為	結果	その後など
01	姥捨山(春照野)	嫁と仲の悪い婆			捨てる	「ほとけ婆に鬼おんじ」と言い男は捨てない
02	姥捨山	母親		枝折	連れ帰る	(教訓)
03	姥捨山	60才の老人	駕	枝折	負って帰る	(教訓)
04	姥捨山(牧野)	親(生活苦)	背負	枝折	?	(断片)
06	捨てた山	親(ある年令)	背負	枝折	置いて帰る	
05	山	母親		枝折	置いて帰る	念仏を忘れないため枝折する枝折は死地への道標
07	姥捨山	婆	籠	枝折	連れ帰る(床下へ囲う)	(教訓)
08	姥捨山	婆(在所の法律)	背負	枝折	?	(断片)
09	山	婆		道に架	?	(断片)
10	山	婆	背負	枝折	?	(断片)
11	?	親	もっこ	枝折	連れ帰る	(教訓)
12	?	婆	かご(弁当3日と水)	枝折	一旦置いて帰る 後連れ帰る	
13	?	親	背負	枝折	連れ帰る	(教訓)
14	山	母親		枝折	息子が連れ帰る 嫁が置いて帰る 二人で連れ帰る	一緒に住む
15	山	母親(与次郎兵衛)	背負(弁当)	枝折	連れ帰る(匿う)	(教訓)
16	?	婆	背負	枝折	?	(断片)
17	姥捨山	母親(規則)	背負	枝折	一度捨てる、後連れ帰る	(教訓)
18	?	親(殿の命令)			家に置いていたが仕方なく捨てる	
19	姥捨山	婆(村の規則)	背負	枝折	置いて帰る	殿、大名から難題(灰縄)山へ聞きに行く。細々と生きている。再び難題(太鼓)で山へ聞きに行く。殿から廃止を得る。
20	姥捨山(霊仙山枝…折という地)	60才の婆	背負	枝折	連れて帰る	「奥山へ手折枝折は誰がため我捨ててゆく子のためぞかし」の歌をよむ。
21	姥捨山	70才の母親	背負	枝折	置いて帰る後連れ帰る(縁下に隠す)	難題(灰縄)を聞きにいき連れ帰る。殿から廃止を得る
22	姥捨山	間に合わぬ親(母)			縁下に穴を掘って隠す	ある時難題(灰縄)を解決し代官から廃止を得る
23	?	婆			隠して置いた	領主からの難題(木の元末、灰縄、曲管)を解決し年貢を免除される
24	?	婆			連れ帰る	難題(灰縄)を解決
26	姥捨山	婆(殿の命令)	背負	枝折	連れ帰る(土蔵に隠す)	難題三つ出る。解決して廃止を得る(教訓)
25	姥捨山	婆	背負	枝折	置いて帰る途中連れ帰る(縁下の穴へ隠す)	寄合の問題を解決し皆で廃止を決める(教訓)
27	姥捨山(信州)	年寄り			捨てずに隠す(奥座敷)	殿から難題(灰縄)を解決してはめてもらう
28	姥捨山	婆			捨てずに隠す(縁下)	殿からの難題(灰縄)を解決して廃止を得る
29	?	婆	もっこ	もっこ	孫の言葉で連れ帰る	

この「野」とよばれた場所での集落、つまり「野の人」の居住下限年代は明治四年である。すなわち当地で最初に作成された近代的戸籍とおもわれる明治四年作成の戸籍<sup>7</sup>には、本村の居住者一番屋敷地から百八十七番屋敷地が記載され、その内容は、僧医師三名を除きすべて農である。数枚の余白のち「野」として一番屋敷地から二十番屋敷地まで住人の記載がある。居住者の所属はすべて卒である。

しかしながら、明治五年以降「野」についての記録はない。例えば滋賀県史その他によると、明治十三年百七十二戸、明治四十五年百五十五戸などの記録があり、これらはすべて本村の戸数のみである。現在の資料では「野」および「野の人」の存在を示すものは何も残されていない。明治四年作成の地図<sup>8</sup>によると「野」は井戸一つを中心に二十戸がかたまつて、極めてせまい地域に居住していたようだ。「野の人」は、江戸時代から作職や小作農などもなく、竹籠づくりなどを生業としていたと伝えられている。また「かごや」ともよばれていた。

明治五年以後「野の人」は、いずこかへ、おそらく東京へ去つたとされ、平家落人伝説の残る伊吹山のさらに奥、甲津原の住人と関係づけられ、その人達の家来であったとの伝説が伝えられている。おそらくは、卒族の合理化のためにつくられたものであろう。なお本村は、江戸時代養蚕などのために自小作や小作農が減少し、自作農家が増加し、裕福な村となった。そのような中で、戸籍での属称は卒とされたが、作職などをまったく持たない「野の人」の置かれた位置は、想像に難くない。

葬送などの関係においてみる時「野」という言葉は、野辺送りや野送りなどと密接な関係を持つと同時に「野の人」や「かごや」と

いう呼称は葬送專業者と共通し、なんらかの形でかつて葬送と関係があったことをうかがわせる。

翻つて本村の墓地は、現在の小字名を堂畑（どばた）と呼び、三百八十基ばかりの墓碑が建てられている<sup>9</sup>。累代墓が主流で家名もなく、名号のみのものが多い。建立年代は江戸時代末期のものと思われるものが多いが、上限は、正徳二年（一七一二）および同三年（ただしこの二基は童子墓である。ついで文化二年（一八〇五）、文政五年（一八二二）などである。年号の比較的新しい個人の墓を除くと名号のみのものが百数基ある。また墓碑の密集度からいっても、ここに埋葬としての性格をみるより、詣墓の方が頷ける。

以上の点からすれば、当地ではかつて「野」とよぶ第一次墓地と、「どばた」もしくは「どうばた」とよぶ第二次墓地があり、両墓制が存在していたことは明白である。そしてこの第一次墓地としての「野」の遺跡を、「死者と生きている者との間の記憶のきれた埋葬場のこうした光景は、この伝説を支える根拠ともなり、それが老人遺棄の伝説を作り出すのに自然であろう<sup>10</sup>」のことがばと対応させる時、そこに極めて素朴な形での棄老の話、つまり姥捨山の原型伝説が生れる。さらにいえば、やがてその伝説は姥捨山の昔話のモチーフをもち、あるいは他の昔話や伝説と結びついて、複雑な伝説を構成していくものといえる。また現在両墓制をとっている地域には、少なくとも単純な形で、姥捨山を特定できるという伝説はない<sup>11</sup>。（亀岡市山階の例）

表番号01の話にそくしていえば「共同的生活に於ける老人は、直接生産過程に参加できない共同利害と矛盾する存在である<sup>12</sup>」とされ、なかでも女性は「仏婆より鬼おんじ」といわれ、協同労働社会においては排除されやすかった。またそれが棄老の伝説を嫁姑関係

の教訓話に矮小化するきっかけともなった。

伊吹町では、両墓制の遺跡が姥捨山とされたのは明らかといえるが、今両墓制だけに限って姥捨山との関係を見ると、両墓制の分布<sup>13</sup>と姥捨山の伝説の地<sup>14</sup>を重ね合わせても明らかないように、両墓制の分布の外部にも姥捨山の伝説が残っている。他の墓制とも合せ考えるべきなのは当然であるが、これだけでも姥捨山の伝説を再検討してみることは必要であると考える。

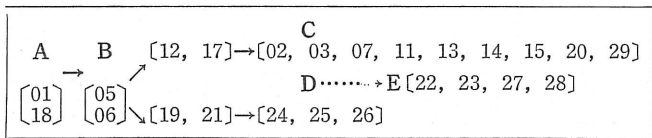
## 二 姥捨山の分類について

伊吹町で採話した姥捨山の話(二九話)の姥捨て、つまり棄老をどう処置したかという点に注目して分類すると、次の図のようになる。Aは極めて単純な形で姥捨山に年寄を捨てたという段階である。

Bは被棄者の行為に枝折を含むが、やはり置いて帰る、もしくは捨てていったという段階である。

Cは被棄者の行為「枝折」が話題の中心となり、それによって捨てることなく連れて帰るという教訓話になっているものである。さらに番号20の話のように「奥山へ手折枝折は誰がため我棄てていく子はためぞかし」などの歌物語として完成するものもある。また「もっこ」が話題の中心となつて、「孫の言葉で連れ帰る」というもっこ型の教訓話となるものもある。このように、枝折もしくはもっこを話題の中心とし、教訓話として姥捨山を完成させた段階といえる。

Dは姥捨山へ一度連れて行ったが、そのまま連れて帰り、さらに難題型が結びつき、難題を解決することによって、棄老の廃止をえるという昔話に展開した段階である。



Bからの展開と考えるC、Dはそれぞれに、その前段階としての12、17と19、21の二タイプがある。前者は一旦捨ててのち連れ帰る。被棄者の行為が枝折であることから、Cへの前段階であると考えられる。後者は一度捨て、そして難題解決のために姥捨山へ聞きに行ったり、連れて帰って帰って問題解決させたりする。すなわちDの前段階といえる。両者に共通するのは、枝折タイプであることと、一度ともかくも捨てているという点である。

Eはこれまでのタイプと全く異なり、最初から捨てに行こうとせず、縁の下や奥座敷に隠して置き、難題の解答をえるというものである。当然話題の中心は難題にあつて、棄老にないものであるから、当然枝折やもっこのモチーフが登場することはない。

A、Bの段階がCに展開していくことで「枝折型昔話」の完成がみられる。もともと姥捨山に行くという意識の痕跡が枝折であつたが、枝折そのものを教訓化していくパターンが特に20に顕著である。

難題型姥捨昔話のDがさらに展開して、姥捨山に行くという意識が全くなくなった時、枝折はなんの意味も持たなくなる。そして難題の部分に興味の中心が移り、つまり姥捨山伝承の重要な構成要素である場所、習俗の変化やそれを伝える印象や意識の風化によって、姥捨山伝承が他の複雑な難題話に展開していく可能性は常にある。例えば、沖繩における「モイェヤカタ」などの親方話<sup>15</sup>を、社会的に役たらずとみられていた人間が、ある日突然難題を解決するという話とみれば、

難題型姥捨話でのE（棄老は全く行われず、話の導入部になってい  
るだけで、中心は難題解決）とおなじパターンであると考えられ  
る。したがって導入部分が棄老であるか、あるいはある特定の個人  
名を持つかによって、特定の個人名を持ったものは伝説になったと  
考えられる。

さらにいえば「モイェヤカタ」などの親方は、時間的には近  
い将来、地理的には伝説人物の出身地や関係地などから離れた場所  
で、親方伝説は普遍化し、昔話化すると予想される。すなわち、時  
間軸における普遍化（共通化）は話題の同時受容性や同質理解性を  
第一義と考えるマスキなどの情報網の影響をもろに受けて、促進  
されるであろうし、地理的（空間軸）に言えば、交通手段の急速な  
発達はその均一化、規格化を促し、よく似た話の共通項のみが強  
調される結果となる。今までは長時間かけて同様に展開した。

以上のようにある特定の場所、人物、習俗が伝説を生み、さらに  
モチーフの充実もしくは普遍化によって昔話化し、その昔話がまた  
特定の場所、人物、習俗と結びついて、伝説として展開していく、  
さらにその伝説が時間軸と空間軸の拡散によって、昔話化してい  
く。このような伝説から昔話、昔話から伝説への展開の一パターン  
を、伊吹町の姥捨山伝承の分析によって明らかにすることができ  
た。

今後の課題として、話のモチーフ分類と分布（空間軸）に、時間  
軸（話の作成時期の特定は、文献資料での確認に拠らなければ困難  
であり、しばしば文献上の発見という偶然によるが、近時的展開を  
考えるならば、話者がその話をいつ憶えたか、いつ聞いたか、十年  
刻みくらいであれば、分類可能と考えられる。）での分類を加えるこ  
とで、伝説と昔話の関係などが明確になる可能性はないだろうかと

考えている。

注

- 1 花部英雄「姥捨山私考」（『昔話伝説研究』第六号）
- 2 大島建彦「姥捨山と行人塚」（『信濃』第三四卷一号）
- 3 前同書
- 4 前同書
- 5 前同書
- 6 昭和五十六年八月、五十七年三月の東海学園女子短大および四  
療学園女子短大合同の「伊吹山麓口承文芸学術調査団」の調査  
結果。なお同報告は五十八年四月刊行予定である。
- 7 滋賀県伊吹町の場氏所蔵文書
- 8 前同書
- 9 昭和五十七年三月および五月の現地調査による。
- 10 関敬吾「姥捨山考」（『昔話と笑話』）
- 11 昭和五十六年一月および五十七年五月の京都府亀岡市旭町山階  
での聞き取り調査による。
- 12 1と同じ
- 13 柳田国男編『民俗学辞典』。分布図は古いのが同じ傾向である  
ことは、「両墓制は近畿や関東に濃密に分布し、東北や西南日  
本には極めて希薄」（赤田光男「両墓制」・日本の民俗『人生儀  
礼』所収、昭和五十二年刊）とあることでわかる。
- 14 2と同じ。論文中の一覧表参照
- 15 話の内容は沖繩民話の会の報告などに詳しい。  
なお、昭和五十七年度大会においての口頭発表に全面的補筆した  
ことを付け加えておく。

（すぎうら まさる・摂南大学）